

〈研究ノート〉

言語感覚と人権意識

前野 昭人

一 「言語感覚」教育の担い手

「国語を正確に理解し表現する能力を高めるとともに、国語に対する認識を深め、言語感覚を豊かにし、国語を尊重する態度を育てる。」（中学校学習指導要領・国語の「目標」、傍線は筆者）

この文言でも明らかなように、国語教育の担う目標の中に、「言語感覚」は重要な位置を占めている。しかし、それをいかに育成するかについては特に指示していない。国語教育のあらゆる領域にわたって、その感覚をみがくものと解すべきであろう。

ところで、国語教育に携わる者として、改めて「言語感覚」に視点を当てた場合、その指導に積極的な姿勢を示しているであろうか。個人の体験からすれば、「言語感覚」に正対した「教育活動はしてこなかったし、そのような研究会に参加したこともない。」「言語感覚」を主題にした研究会が存在するのか否

かさえ寡聞にして知らないのである。

むしろ、人権問題とのかかわりににおいて、つまり、同和教育・人権思想の推進と普及の過程で、言葉の問題が大きな位置を占め、それは常に言語感覚を内在させてきたのである。別の言い方をすれば、人権を尊重し、かつ、守る運動の過程に、言葉の問題は避けて通れない位置と機能を持ち、積極的に言葉そのもののゆきざりをかけ、表現の適不適を検討して、適正な言葉を創造してきたのである。

言語感覚の教育は、冒頭に示したように本来、国語教育が担うものであるし、その教育は国語教育のあらゆる領域で推進しつつあるが、明確な形で、その創造的な仕事を推進してきたのは人権尊重をめざす教育運動サイドであると認識するのである。

二 「父兄会」の呼称をめぐる

『徳島教育』昭和六十三年四月号（徳島県教育会発行）の「随想」欄に掲載された野々村宏氏（美馬郡口山中学校教諭）の「父兄会」は、本稿のテーマともかわる内容を持ち、近ごろ反響を呼んだ文章である。

野々村宏氏は冒頭、

「ある会合で「ご父兄の皆さんが——とあいさつした人に、会後「あれは保護者の皆さんといふべきですよ」と、いった人がいるという。生徒の親達に対して「ご父兄」といったの

と「保護者」といったのでは、どれだけの違いがあるのか、浅学な私にはわからない。

と述べ、国語辞典に示された「父兄」と「保護者」の語意を引きつつ、両者共似ているので、へどちらでもたいしてちがいのことがわかる」と言われる。ちなみに野々村宏氏が調べた三省堂の『新国語中辞典』には次のように記しているとのことである。

〈父兄〉①父と兄②児童生徒の保護者

保護者Ⅱ親または親にかわって児童などを保護する義務のある人

「父兄会」の呼称を是認する立場をとる野々村宏氏は、さらにその見解を叙述していくのであるが、要点を次に記しておく。これまで会合において「父母」「父兄」という言葉を使ってきたが抗議を受けたり叱られたりしなかった。

。「父兄」を父と兄だけに解釈した人は、戦前の男性中心であったことの反動（せまい考え）であろう。

。今まで（父兄会に）母・姉・祖父母等が参加しても何の支障もなかった。

。「父兄」に反対や異議を唱えた人は女性軽視ととったかも知れないが、使い手はそのような意図をもっていない。

。話す場で（「父兄」か「保護者」か）考えて発言しようとするれば、物がいえないようになり無言の会になるおそれがある。法律用語「親権者の皆さん」という言い方をすれば正しいが、これでは固苦しいふんいき、冗談もいえない場をつくる

だろう。

。一見不都合のようにみえても習慣化した行為や言語が多く、字句だけをとりたてるのはおかしい。

ここには個人としての言葉感覚と、世間の人々（他者）の言語感覚（類推）とが示され、言語に関する問題提起をされたのである。

『徳島教育』昭和六十三年七月号に、〈父兄会〉への反論と題して、岡崎知信氏（小松島市坂野小学校教諭）の随想が載った。

岡崎知信氏は「誌上で反論」する立場から、

〈「父兄」という表現の仕方についてですが、私は反対です。やはり、「保護者」という表現が一番適切ではないでしょうか。とされ、その論旨を展開される。その要点を次に記す。

。戦前、親権を男性にしか認めようとしなかったところに問題がある。

。PTA行事に母親・祖母の出席率が高く母親自身が「私達父兄」としましては……」等の発言が見られる（そのたびに啓発している）。

。父と兄のいない家庭に育ち、担任から手渡される親あての「父兄各位」の文言に、くやしい辛い思いをもち、教師になってからは「自分のような悲しい思いを、二度と子供達にさせてはならない……」と誓いつつ、「父兄」の表現を指摘することに努めてきた。

。伯父と伯母に育てられている子供を担任したとき、両親・

祖母のほかに「おじさんかおばさんか、家にいる大人の一人に」と言い方を変え、保護者から感謝の言葉を受けた。

ある子供が低学年時に「このプリントをお母さんに」と配ると、「僕にはお母さんはいない」と言つてプリントを破り捨てた子に出会ったが、その子の保護者は祖母であつた（当然、呼称に配慮した）。

岡崎知信氏は、

「以上の体験からも、私は、「保護者」という言葉が、子供を養育する全ての人を指す言葉だと思ひます。よつて、私達教職員から、「父兄」という差別的響きのある言葉をできるだけ使わないようにしていきたいと願つてやみません」と主張する。

野々村宏氏が語意論的な発想に立つのに対して、岡崎知信氏は言語感覚の面、人権擁護の視点から発言し啓発していると、私は見る。

三 結婚式場案内板の表現

ところで、「父兄会」をめぐる随想は、もう一つの呼称（内容にも触れていた）であつた。それは結婚式場における案内板の表現である。野々村宏氏は言う。

「ついでながら、結婚式場へいつてみるがよい。憲法や民法等の法律上、成年男女の結婚は、自由意志でできるといつても、案内板は「〇〇家××家結婚式場、披露宴会場」と書か

れているものが多く、公的施設である、公民館、△△会館、〇〇センターといった所を借りても、似たような案内板を出している。これこそ旧民法の考えであつた、結婚は家と家との結びつきであることの表れであると思われるのだが、ごく普通に書かれ、誰も不思議におもわれない。むしろ当然の如く見て会場へ入っていく。」

「父兄会」是認の立場を貫き、さらにこのあと、両家の両親や親族が指導し励ますのであるから、両家親族固めの行事が行われるのであり、慶事に大安吉日の日を選ぶのも人づきあいの知恵で、（そのままでも不都合なく行われていることは、ことさらに目くじら立ててまでいうこともないとおもうのだが、どうだろう。」と結ぶのである。

岡崎知信氏は「反論」する。

「第二点目の、「〇〇家××家結婚式場」の表示についても、家と家とが結婚するものではありませんから、私は、身内の結婚式には、「新郎の名・新婦の名結婚式場」と表示するよう、式場に申し入れさせています。」

結婚する夫婦のそれぞれが生い育つた家、それぞれの親族を立てるか、結婚する夫婦のそれぞれの人間を立てるか、ここにも両者の思想に根本的な相違が看取される。

言語感覚と人権意識についての問題提起となっているのである。

四 障害者にかかわる言語

小説『走れメロス』（太宰治）が教材化されて久しい。人間の生き方について問題提起すると共に、ストーリーがおもしろく、文体も妙味ある作品といえるであろう。中学生に対して情意的な反応をひき起こす魅力を備えている。

ところで、〈邪知暴虐の王〉との約束を守るため、主人公メロスは幾つかの障害を乗り越え、ひたすら人質セリヌンティウス待つ王城へ急ぐのであるが、途中、氾濫した川に遭遇する。濁流を泳いで対岸へ渡らなければ王城へ行けない。手元にある『中等新国語』（光村図書・昭和四十七年二月発行）によると、メロスの泳ぐ場面の一節を次のように掲載している（二年用）。

メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇（だいにび）のようになんかの力（ちから）を腕に込めて、押し寄せうず巻（うずま）き引きずる流れを、なんのこれしきとかき分けかき分け、めくらめつぼう、獅子奮迅（ししふん）の人の子の姿には、神も哀れと思っただか、ついに憐愍（れんみん）をたれてくれた。押し流されつつも、みごと、対岸の樹木の幹にすがりつくことができたのである。』

その後、この作品は教科書から姿を消した。そして、現在使用中の『国語』（光村図書・昭和六十二年二月発行）に再び登場した（二年用）。旧教科書と同じ場面を次に引いてみる。

メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇（だいにび）のようになんかの力（ちから）を腕に込めて、押し寄せ渦巻（うずま）き引きずる流れを、なんのこれしきとかき分けかき分け、獅子奮迅（ししふん）の人の子の姿には、神も哀れと思っただか、ついに憐愍（れんみん）をたれてくれた。押し流されつつも、みごと、対岸の樹木の幹にすがりつくことができたのである。』

の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻（うずま）き引きずる流れを、なんのこれしきとかき分けかき分け、獅子奮迅（ししふん）の人の子の姿には、神も哀れと思っただか、ついに憐愍（れんみん）をたれてくれた。押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹に、すがりつくことができたのである。』

両者には、どんな違いがあるか。

旧教科書における語の表記「うず巻き」「みごと」が「渦巻き」「見事」に変わっている。それ以外に一箇所、大きな違いがある。先に出ていた「めくらめつぼう」が、新しい方には見えないことである。

このことは、教科書教材を作成する過程で障害者蔑視の語感を持つ言語「めくら」を排除する立場をとったものと推測される。このことについて編集の任にあたる方に問うたことがあるが、推測通りであった。

しかし、文芸作品の肉体の一部である表現語彙を他者が（それがたとえ教科書編集者であっても）勝手に削除してよいものではない。編集者の方で太宰治の図書を調査しているうちに、幸いにも「めくらめつぼう」の語彙が載っていないものが見つかり、著作権を持つ方の許しを得て教科書掲載を決断したとのことである。ちなみに旧教科書と新教科書の『走れメロス』の出典を記しておく。

⑩『定本太宰治全集第3巻』（筑摩書房・昭和三十七年五月初版刊）

⑪『太宰治全集3』（筑摩書房・昭和四十二年六月初版第八刷）

「めくらめつぼう」の語彙を除外したということについて教科書会社は正式に発表していないように思われる。しかし、その意図は、暗い、障害者蔑視の語感を持つ言語を追放することにより、障害者の人権を尊重する思想を具現化したと解するのである。

「走れメロス」はひとまずおいて、法令における障害者の言語を見ることにしよう。

徳島県学校職員給与条例（昭和二十七年三月三十一日条例第四号）の「扶養手当」第九条の文言は、昭和五十年七月十八日第三十四号改正の段階では次のようになっている。

①扶養手当は、扶養親族のある学校職員に対して支給する。

2前項の扶養親族とは、次に掲げる者で他に生計のみちがなく、主としてその職員の扶養を受けているものをいう――

一五 不具はい疾者

この部分の文言が昭和五十七年三月二十五日第二号、七月十三日第二十四号改正の段階では、次のようになっている。

（条文省略）――五 重度心身障害者

二つの文言に見られるように「不具はい疾者」から「重度心身障害者」への改めは、人権擁護の思想が法令の文言に波及したものととらえることができ、また、人間の尊厳を言語感覚の面から保障しようとする運動の一環として受けとめることができる。

「障害者の権利宣言」が採択されたのは一九七五年十二月九日で、国連総会決議三四四七（第三十回・会期）であった。あ

れから十年余の年月が流れた。その権利宣言の第二項において「人種」「皮膚の色」「性」等と共に「言語」を置いていることに注目する必要がある。

五 人権を尊重する言語の創造

数年前、勤務校で何かの報告文書を書き、学校長に閲読してもらったところ、文章中にある「共稼ぎ」に朱筆が入り、「共働き」になっていた。夫婦共に家庭外に出て働き、生計をたてる意味においては両語共通であるが、前者には、当該家庭の経済的貧困が語感に漂っている。後者になると、その意味がやわらぎ、夫婦対等の労働参加の言語となる。人間の暮らし、ひいては人権を配慮した言語の創造と考えてよいであろう。

しかし、手持ちの国語辞典の幾つかには、「共稼ぎ」は出ていても、「共働き」は出ていない。「共働き」の使用歴史が新しく、国語辞典に登場するに至っていないのである。それゆえ、国語辞典への掲載を要請する働きかけをすべきであろう。

親のない家庭を「欠損家庭」と呼ぶ向きがあるが、それよりも「欠親家庭」と呼称する方が適正な表現であろう。同和教育の校内研修会で学んだことの一つである。

もう一つ同和教育の研修で学んだことに、「啓蒙」と「啓発」の用語がある。「啓蒙」は、知識に暗い人に正しい知識を与えるという意味を持つ。同和教育の場合、「同和」に関する知識が十分でない人に対しては、ある意味で「啓蒙」すべきである

が、今日の状況は、同和問題の知識は持っているが、科学的、合理的な考え方ができず、行動化・実践化になると消極的に傾く人々をかかえているのである。知識はあっても行動できない人間に対しては「啓蒙」でなく「啓発」しなければならない。

昭和五十九年六月十九日に、地域改善対策協議会の会長・磯村英一氏は、内閣総理大臣及び関係各大臣あてに地域改善対策協議会意見具申をしたが、そのタイトルは「今後における啓発活動のあり方について（意見具申）」であって、「啓蒙活動」ではない。この意見具申の見出しとして、「啓発の具体的方法について」「地域における啓発」「職場における啓発」「行政機関における啓発」「啓発の内容について」「啓発の実施主体の役割について」等が見られ、「啓発」の表現を一貫させているのである。知識に明るくても行動化できない人間から、知識に明るく行動化できる人間への変容を、言語に託して創造しようと志向しているのである。

さて、人権を大事にする意識は、わが国に根付いてきた敬語にもゆさぶりをかけ、言語感覚に照らして、新たな創造を図っていくことになる。わけても謙譲語については、人権というスポットを当てる場合、問題をはらんでいるのである。家族であるがゆえに美しいとされてきた「愚妻」「愚息」「豚児」等の言語は、そのまま使ってよいのであろうか。家族の人権を大事にする言語について考える時代となっているのである。

人権とのかかわりにおいて言語感覚が働き、みがかれ、言語

感覚が機能することによって、適正な言語を創造してきた。言語は人権尊重の思想や行動と不可分の存在となってきた。国語教育は、このような状況にどう正対するか。そろそろ腰を上げる時代を迎えている。

本稿は手元にあるささやかな資料をもとに考察したのであるが、新たな資料の教示を願うと共に、論考については是正すべき点があれば御指摘をたまわりたい。

今回は人権意識とかわかる言語感覚にしほって考察したのであるが、日常の言語生活には、言語感覚とかわかる問題は多々ある。たとえば、古い伝統の根付く手紙の形式や言葉は検討しなくてよいのか、電話のあいさつ語は妥当な言葉になり得ているか等である。こうした課題への取り組みを期しつつ、ひとまず筆をおく。

会員募集

徳島大学国語国文学会は、国語国文学・中国文学・国語教育の研究ならびに会員相互の親睦をはかることを目的に、昭和六十二年十月に発足しました。この趣旨に賛同なさる方なら、どなたでも御入会になれます。本学会では、一年に講演会一回、研究会二回、機関誌『徳島大学国語国文学』発行一回、『会報』発行二回を計画しています。会費は、三千元（年間）。このほかに入会金として二千元をいただきます。